1	
言　葉	言葉の力をつけよう（音読1年④） 〔文学的な文章「坊っちゃん」〕
名　前	

★読書によって知識や情報を得たり、作品を味わったりすることで、自分のものの見方や考え方を広げることができます。小学校の読書経験を生かして、引き続き、読書に親しみましょう。
次の文章は夏目漱石の『坊ちゃん』という作品です。四国の松山に赴任した江戸っ子教師「坊っちゃん」は、同僚の「山嵐」とともに、いたずらな生徒達や策略家の教頭「赤シャツ」に、持ち前の正義感で対抗するというユーモアと風刺に富む作品です。冒頭部分を、音読してみましょう。

やってみよう

親譲りの無鉄砲で、子どもの時から損ばかりしている。小学校にいる時分、学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと聞く人があるかもしれぬ。べつだん深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りることはできまい。弱虫やあい、とはやしたからである。人に負ぶさって帰ってきたとき、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かすやつがあるかと言ったから、この次は抜かさずに飛んでみせますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフをもらってきれいな刃を日にかざして、友達に見せていたら、一人が光ることは光るが切れそうもないと言った。切れぬことがあるか、何でも切ってみせると請け合った。そんなら君の指を切ってみろと注文したから、なんだ指くらいこのとおりだと、右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕は死ぬまで消えぬ。